

徳川みらい学会第3回講演会

「家康を天下人にした教育と学問」

静岡大学名誉教授 小和田哲男氏



徳川みらい学会の第3回講演会を8月20日(火)、静岡市民文化会館で開催しました。講師は静岡大学名誉教授の小和田哲男氏。家康公が何を学び、どのように活かしたのか語っていただきました。

要旨は次のとおりです。

幼少時代

『武辺咄聞書』に家康公は「幼少より臨濟寺の雪斎にたより兵書を読習給ふ」と書かれています。家康公は、8歳から雪斎が亡くなる14歳の時まで6年間、雪斎に教えを受け、兵法書をもとに、普通の人間としていかに生くべきかというだけではなく、上に立つ者としての務め、国をいかに治めていくか、人のリーダーとしてどういう資質が必要か、そういうところまで習ったと思われまます。

座右の書『吾妻鏡』

家康公は大御所として駿府に入城した時に「駿河文庫」という

私設図書館をつくりました。和書は『日本書紀』『続日本紀』『延喜式』、漢籍は『貞観政要』『周易』『論語』『大学』『史記』など1,000余部、約1万冊の蔵書がありました。

源氏が三代で滅びた後、執権北条氏が編纂した鎌倉幕府の歴史『吾妻鏡』を通して、家康公は、源頼朝が鎌倉に武家政権を樹立していった歴史を克明に学ぼうとしました。

源氏と平氏が政権を交代で握る「源平交代思想」という面白い考え方があり、平清盛から始まり、次に源頼朝、北条氏(本姓・平氏)、足利尊氏(源氏)と交互に政権をとっています。次の織田信長は本来の姓は藤原氏でありながら、途中から平氏を名乗ります。その後を狙っていた家康公も同様に、途中から源氏の系図を作り、源氏を名乗りました。このようなこともあり、座右の書として『吾妻鏡』を読んでいたと思います。

家康公の印刷事業

「東照宮御実紀附録巻二十二」によると、家康公は伏見の円光寺に木版活字を作らせて、『貞観政要』や『孔子家語』を印刷させています。その後、駿府において銅版活字による印刷事業を行います。

印刷事業に本格的に力を入れる家康公の思いは、関ヶ原の戦いで武断政治は終わり、今後は文治政治だという宣言でもあったのだと思います。駿府では『群書治要』と『大蔵一覽』の印刷を手掛けました。

それまでの本は書写が多く、読む人が限られている上に、写し間違いの可能性がありました。活字にすることでかなりの部数ができ、多くの人に読まれます。『太閤記』や『南総里見八犬伝』といった本がその後出版され、書籍文化が我が国の文化として定着していきますが、その基礎を築いたのは、この時期の家康公の印刷事業であったと言えます。

前車の覆るは後車の戒め

「前車の覆るは後車の戒め」は、戦国時代の子供たちが勉強した『実語教』や『童子教』という本に出てくる言葉です。家康公は、先人たちがどう政治を行ったか、その政治の成功例・失敗例を教育や本で学び、それをただ学んだのではなく、自分の政治の指針としました。

家康公を天下人にした教育と学問というものを、いま一度私たちは洗い直し、もう少し目を向けていく必要があるのではないかと感じています。



個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈問い合わせ〉徳川みらい学会事務局 〈TEL〉 284-9660 〈HP〉 [徳川みらい学会](#) [検索](#)